

人流インタビュー——この人に聞く③

「世界に開かれた大学づくり」を！

「知的国際貢献」こそ二一世紀の日本の最重要課題

東京外国語大学
学長 中嶋嶺雄さん

アジア太平洋大学交流機構 (UMAP)の単位互換制度が スタート

——UMAP事務総長として、大学の国際化に熱心に取り組んでいますね。

日本の大学は過去百年間、日本人が日本人に日本語で教育するのが基本で、外国人の数も、日常的な異文化接触もごく限られたものでした。だが、そんな「内向き」の姿勢のままでは、いつまでたっても本当に世界的に活躍できる国際人を育てることはできないし、また経済大国・日本への外からの熱い期待にも応えることができない、と考えているからです。

二一世紀の日本が取り組むべき最も重要な課題として、私は「知的な国際貢献」をあげたいと思います。それは、ある意味では軍事的な安全保障よりもっと重要

であり、それを実現するにはまず、大学レベルでの学生や教職員の積極的な知的交流が必要不可欠です。そのための国際組織としてアジア太平洋大学交流機構(UMAP)がつくられ、日本の国立、公立、私立大学がみんな協力して参加することにになりました。長年の夢がようやく実現するわけです。

UMAP計画は九一年にオーストラリアが提唱して以来、毎年会議を重ね、九八年夏に正式にスタートしました。単位互換制度など具体的、技術的なスキームも整備してきました。参加国がGNPの大きさに応じて負担金額を決めるアジア太平洋経済協力会議(APEC)方式で、いわばAPECの大学版です。この四月からテストケースとして、日本では東京外大、京都大、広島大がUMAPの枠組の留学生の受け入れを始めました。

——日本政府は八〇年代に「留学生一〇万人計画」を打ち出して、二一世紀初めには日本にいる外国人留学生を一〇万人にする目標を立てましたね。

一五年前にはわずか一万余千人、それがようやく昨年度で五万六〇〇〇人くらいです。日本の大学の学生数に占める留学生の比率は、わが東京外大が国立では一番高く一三・五%、これでも多いとは思えません。国立大学全体では三・七%、私立ではわずか一・七%しかありません。ただ単に数が増えればいいというわけではないのですが、一番重要な問題は、外国から見て日本の大学が留学するに値するだけの価値がある大学か、ということです。つまり問われているのは、大学の国際競争力なのです。

最近、全国各地に「国際」の名前のつく大学がたくさん誕生していますが、中には留学生が一人もいない「国際大学」がある。世界から見てもっともっと魅力ある大学づくりに取り組まなければならぬと思いますね。

国際競争力のある 魅力的な大学づくりを

——言葉の壁、文化の壁、制度の壁も高いですよ。

日本の大学に留学するには、日本語能

力試験を受けなければならないのですが、この試験内容が日本語独特の微妙なニュアンスの理解力を試すものが多い。論理的に学問上の意見交換が出来れば十分だとする「アカデミック・ジャバーニーズ」に変える必要があります。とりわけ理科系の場合、辞書にある単語を並べただけでも相当、意思疎通できますし、基礎学力さえあれば大丈夫。あとは慣れで、来日後できてくればいいのであって、最初から高度の日本語が駆使できなければならぬと決めることは単に障壁を高くするだけです。

また日本語能力試験の時期、大学の受け入れ決定の時期、単年度会計主義による予算配分時期などの関係から、現状では学生が渡日前に留学先の大学を自分で選ぶことができません。これでは、留学生がどの大学の、どの先生の授業を取りたい、などという希望は、研究生として一年間余計に過す以外、全く無視され



東京外国語大学学長・中嶋 恒雄氏

ます。

さらに日本の大学教師の採点は全体に恣意的で、全員に甘く「優」をつけたり、逆に辛くてほとんど落としてしまう、という成績評価がまかり通っています。各学期の授業の具体的な目標は何か、個々の学生がどのレベルまで到達したかを客観的に評価できる基準がない。これでは「優」の数がいくらある、といっても、その学生がどれだけ国際的に評価できる水準に達しているのか、わからない。単位互換制度を導入する場合の国際的信頼性の問題がすぐに発生するわけです。U M A P 誕生の意義もまさにそこにあります。

—— 大学改革の一環として、国立大学を独立行政法人に、という動きが出ていますが、国立大学協会副会長としては…。

たしかに今の国立大学は国営企業と同じで、教職員の間には法律に守られて、過度に保護されている面があります。そこで無理に思い切った改革などしなくても定年まで安心して勤めていられるのだから、と既得権益にしがみついている傾向がある。それではいつまで経っても、質の高い優れた大学づくりはできないし、アメリカの大学には追いつけません。

「発信型」の大学づくりを

—— 外大は今秋、府中に移転しますが、

多摩地区での五大学連携や東工大などとの五大学連携構想が出てきましたね。

私たちの大学を、外から知識を吸収するだけの「受信型」の大学から、世界に貢献できる「発信型」の大学に改革したいという願いからです。学部学科が違う異質の大学と密接に連携することによって、新しい学問領域の開拓が期待できます。例えば、文系の言語研究者と理系のコンピューター研究者が協力しあうことで、自動翻訳の道を切り開く可能性が出てくる。まさに本当の意味での「学際」研究ができます。そうした努力が、従来の大学の縦割り制度を改革するのに役立つはずです。

また教育内容の質を高める上で、実社会で優れた業績を挙げってきた職業人をもっと自由に教師として迎えたいですね。豊富な実務経験を持った社会人の多くは定年を迎えても元気で、知的遺産を後世に残したいという意欲は強いものです。そうした人たちに若者に教える機会を与えて、ボランティア活動で生きがいを求めてもらう。そうした工夫をすることが、大学をより一層社会に開かれたものにし、同時に、これからの高齢化社会をより明るく、充実させることにも役立つのではないのでしょうか。

(聞き手…「国際人流」編集局)

国際人流

THE IMMIGRATION NEWSMAGAZINE

特集●不法滞在外国人の減少に向けて

特報●「家族滞在」に係る資格外活動許可の
取扱いの見直しについて

News Scope●来日外国人犯罪の現状

第157号

2000

June

